

Dr.松島の往診日記 〈第11話〉

往診先で出会った

「免疫療法を支える食事療法」



松島修司 東京・京都統合医療ビレッジ腫瘍外来

私は、東京・千代田区の統合医療ビレッジの腫瘍内科において、主に先進温熱治療を中心にがん治療に従事しております。日々、診療を重ねていると、思いもよらない場面に遭遇します。そのエピソードを温熱治療や免疫療法の効果と共にご紹介する「往診日記」の第11回は、「食事療法の重要性」に関するお話です。

再確認させられた 「適度な食事療法」の 重要性

2009年12月、積極的に食事療法を取り入れ、卵巣がんと闘っている患者さんが、中京圏のある町から東京・統合医療ビレッジにやってきました。その患者さんに對し、当院では腫瘍免疫チェック（抗がん細胞活性・免疫バランス・

いることはできません。そこで、アバスチンをネクスバル（腫瘍細胞増殖と腫瘍血管新生を阻害する経口薬）に替え、自己活性化リンパ球療法と併用することにしました。この治療を1カ月（往診は2回）ほど続けた結果、腹部の腫瘍塊は半分ほどになり、腹水もひけ、姿見は病人だとわからないほどになりました。

この患者さんを通して私が教えられたことは、アバスチンからネクスバルへと切り替えたことによつてもたらされた奏効だけではありません。食事療法と自己活性化リンパ球療法の相性のよさを改めて思い知らされたのです。

当院の患者さんの中には、がん克服のために食事療法を取り入れている方が少なくありません。当院は「星野式ゲルソン療法」(*)を開発した星野仁彦医師ががん患者さんのカウンセリングをしているロマリンドクリニック（福島県郡山市）と長年にわたり業務提携を結んでいることもあり、私も食事療法が免疫力の向上を促すことには着目していました。そんななか、今回往診した患者さんによつて、改めてそれを見直すようになったのです。

自己活性化リンパ球療法を行う際、食事療法を実践している方は、がんの原因となる食物を極力摂取しないことで血液の状態が良好に保たれているため、比較的、スムーズにリンパ球が培養できます。ただし、その食事療法もあまりに厳格だと、時には患者さんに必要な栄養まで排除されてしまい、基礎体力が維持できない状態に陥ってしまう危険性があります。つまり「適度で日々継続できる食事療法」が大切なのです。実際に、今回往診後に、その患者さんと同じメニューの食事を食べる機会がありました。が、栄養のバランスがよく、免疫力アップをサポートするメニューでした。

この患者さんから「体調が良くなり、念願だった娘の卒業式出席することができました」という感謝の言葉をいただいたとき、私は化学療法や免疫療法の陰にある「適度な食事療法」の重要性を改めて実感しました。

※ドイツの医学博士であるマックス・ゲルソン氏が開発した厳格な食事療法を実践しやすくしたものの。

まつしま・しゅうじ

帝京大学医学部卒業後、大学での研修のかたわら、星野泰三医師に師事し、免疫学について幅広い知識を得る。統合医療ビレッジ付属中央研究所にて、活性化リンパ球の培養および腫瘍免疫チェックに携わる。これら免疫療法を専門にしたがん治療に携わってきた経験と、生物学的なドックで体の状態や将来の予想を立てる腫瘍免疫チェックを生かし、現在、腫瘍内科での治療・免疫治療・温熱治療・ドック外来などを行っている。